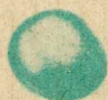


紫陽社

いちにち



Ichinichi Hiroko Okajima

岡島弘子

いちにち

一九八七年九月三〇日第一刷

著者 岡島弘子

201 狛江市東野川三―一七―二―
302
発行者 荒川洋治

発行所 紫陽社

359 所沢市北野九―五

電話〇四二九(三九)五一八二

制作 レンツ・紫陽社

©Hiroko Oka.jima, 1987

装幀 板垣光弘

定価 一五〇〇円

いちにち

∴

岡島弘子詩集

いちにち
目次

・いちにち

会話 12

前髪を切る 16

髪を結いたいアキコのように

18

食卓 22

80%は主婦だけど 24

滝のように裁ちたい 28

泡になる日 34

台所には門が欲しい 40

洗う 44

宇宙が見える 46

肉じゃがの作り方 48

ごはんがたけるまで 50

傷 54

訪問者 56

光る水 58

・水のいちにち

あやとり 62

漣織の織りかた 66

・窓のいちにち

窓をあけるとスーパーマン 74

ぼくは探偵 78

北の窓 90

い
ち
に
ち

いちにち

会話

腰をかめて顔をさしだす

洗面器の水にささげるかっこうで

しんとした水面にいきなり手を入れる

悲鳴があがってくだけ散る その奥に

墓石のようなものを見たと思った

水をすくって まず目にかける

じゅっといって大きく揺らぐ炎

私の中でひと晩中燃え続けていたものだ

こころの奥で

吃水線だけを祈りながら

顔をそっと水に入れる

両手でむくようにする

顔からこだわりがはがれて

水の中でゆるんでいくのを見るのはいい

おはよう 骨は元気ですか

ええ おかげさまで ところで

ゆうべはよく死ねましたか

激しい水音の中で

そんなあいさつを交したように思う

水の中にいると

感情はじかに伝わってしまう

かすかな動揺にも水は波立つ

そのあと波紋にしていつまでも反復してみせる

強いものをねじふせたまま

吃水線をはさんではりつめていると

体温が硬直してくる

水とつりあえずにむずがゆい　そこだけ

水がいくども私を越えることがあって

絶対零度の感触が目をごえさせる

水の中で体温を保つのはむずかしい

見つめている吃水線がゆれて目のはしを傷つける

しぶきにいくども火が消えかかり

私が沈みはじめている

ようやくその人は立ち上がる

では また といったあと

うしろむきになって

墓石をかぞえなおしているのだろうか
そうやって水面をしずめているのだ

ひふが吃水線のとおりすり傷になっている
氷のようになった顔の上を伝う水滴

は あたたまっていて
感覚をとりもどす

いそいでタオルを顔にあてる

泣いているようにみえるかしらと思う